

児童の学級適応に関する研究

学校教育専攻
学校心理学コース
M06095B
中村 勝代

1 問題と目的

平成 19 年度より特別支援教育が本格実施されて、今年で 3 年目を迎える。現場レベルでは、法整備が整ったとはいえ、多くの課題を抱えている。

佐々木(2006)によれば、「学級崩壊」のような学校現場における危機的状況の原因は、大きく 2 点に絞ることができる。1 点は、少子化による兄弟数の減少や地域社会の弱体化による人間関係の希薄化、保護者の子育てに対する意識の変容など社会状況の変化に伴う子どもたちの社会的スキル不足の問題である。もう 1 点はこのような児童の変容に対して柔軟に対応できない教師側の学級経営におけるスキル不足の問題である。

教師側の問題については、行政側の統計結果報告や民間研究団体の調査結果がまとめて出版されており、自らのスキル不足を自覚している教師が少なくないにもかかわらず、実践的な研究論文は数少ない。

学校現場における教師のスキル向上に関する研修や子どもたちの変容に関する研修への参加は、教師自身の意思に委ねられるところが大きい。

教師が研究対象となり、教師の学級経営スキルについて検討した学術的な実践的研究報告が少ないのは、研究の対象となり、データを提供することに抵抗を示す教師の認知を促す手立てが難しいのではないかと考える。データの収集が難しければ研究は成り立たず、教師の認知の変容がなければ教師のスキル向上を期待することは難しい。

軽度発達障害児の小学校適応に関する学校心理学的研究については、浅川・長谷川・古川(2005)によると、AD/HD 児の学校適応を考える時、統制志向の教師は罰や叱責といった方略を用いやすい。ただでさえ失敗を経験しやすく、自己評価が下がりがちなこのタイプの児童に対して統制志向の教師は必ずしもふさわしい取り合わせといえないことを示唆している。

AD/HD だと認知されるまで、子どもたちは不安や葛藤のなかで挫折経験や失敗経験を積み重ね、その結果、自己評価が低くなり、無気力、不適応になるなど二次的な情緒障害を引き起こすことが多いと思われる。AD/HD の半数が反抗挑戦性障害に移行するという厚生労働省の研究データもある。こういった二次障害を防ぐためには、そのような子どもたちをどのように見つけ出し、どう理解し、どう対応していったらいいかが重要な鍵となる。

本研究の目的は、学級内外での行動の仕方が十分理解できており、自らの判断で行動したいという 6 年生を対象に AD/HD 児の学校適応に関して学級集団の構造と学級雰囲気との関係を分析することである。

児童の教師に対する信頼感と学校適応感の関連を検討することによって、最終的には AD/HD 児の学校不適応を未然に防ぐ知見が得られると考えた。

2 方法

被調査者

K市の2つの公立小学校（A校、B校）について、各校とも6年生で調査を実施。クラス単位で調査した。内訳は、A校128名（男子62名、女子66名）B校102名（男子51名、女子51名）。合計230名。学校教師の日常観察から、A校に1名のAD/HD児童、B校に2名のAD/HDサスペクトの児童が在籍していた。A校は、市の東部に位置し総児童数826名の中規模校。B校は、市の南部に位置し総児童数677名の中規模校で、筆者の勤務校であった。

手続き

調査の時期は、2008年7月中旬。

調査の手続きは、調査対象者の確保、回収率、回答の質の確保の観点から調査対象者の在籍する学級単位で授業時間などを用いて集団で実施された。具体的な方法は、まず、学級担任の指示のもとで一斉に回答を求める。質問紙は無記名で行い、「結果は、パソコンで処理されるので、自由にありのままに答えてください。」と担任を通じて学年共通に実施した。統計処理は、SPSSを使用した。

材料

- ① 学級雰囲気をとらえるために学級雰囲気尺度（根元,1983）
因子分析の結果から、「安心」「沈静」「凝集」「切迫」の4因子から構成されている。
- ② 学校適応感をとらえるために教育環境適応感尺度（小泉,1986）
「対教師関係」「学習意欲」「自校への関心」「級友関係（+）」「級友関係（-）」の5因子から構成されている。

結果

学級雰囲気尺度では、AD/HD在籍群が、AD/HD不在群に比べて、「安心」の因子において群の主効果がみられ在籍群の方が有意に高かった（ $F(1,226)=21.023, p<0.001$ ）。「凝集」の因子については、有意差があり、群×性において交互作用がみられた。

（ $F(1,226)=4.365, p<0.05$ ）。「沈静」の因子では、群の主効果がみられた。「切迫」の因子では、有意な性の主効果があり女子より男子の平均値が高かった（ $F(1,226)=8.670, p<0.01$ ）。学校適応感尺度では、「対教師関係」「学習意欲」「自校への関心」「級友関係（-）」において群の主効果がみられ在籍群の方が有意に高かった。

考察 自分の学級が楽しいと肯定的に捉えているのは、AD/HD不在群に比べて、AD/HD在籍群の方であった。高学年になると、女子の小集団化が進み、小さなグループ同士のトラブルもよく見られるが、今回の調査では、男子よりも女子の方が在籍学級に対する安心感の平均値は高かった。

学校適応感尺度の「対教師関係」においてもAD/HD在籍群の方が、AD/HD不在群に比べて平均値が高かった。鍋谷（2007）によれば、教師がAD/HDの子どもの示す行動特性を正しく理解し、肯定的に関わることにより、周りの子どもたちの関わり方に変化が見られるという知見と一致する。

本研究の目的であった児童の教師への信頼感を深めることにより、AD/HD児の学校不適応を防ぐとともに二次障害の未然防止のために、現場の教師は、さらに自ら研鑽を積んでいく必要がある。

主任指導教員（浅川 潔司）

指導 教官（浅川 潔司）